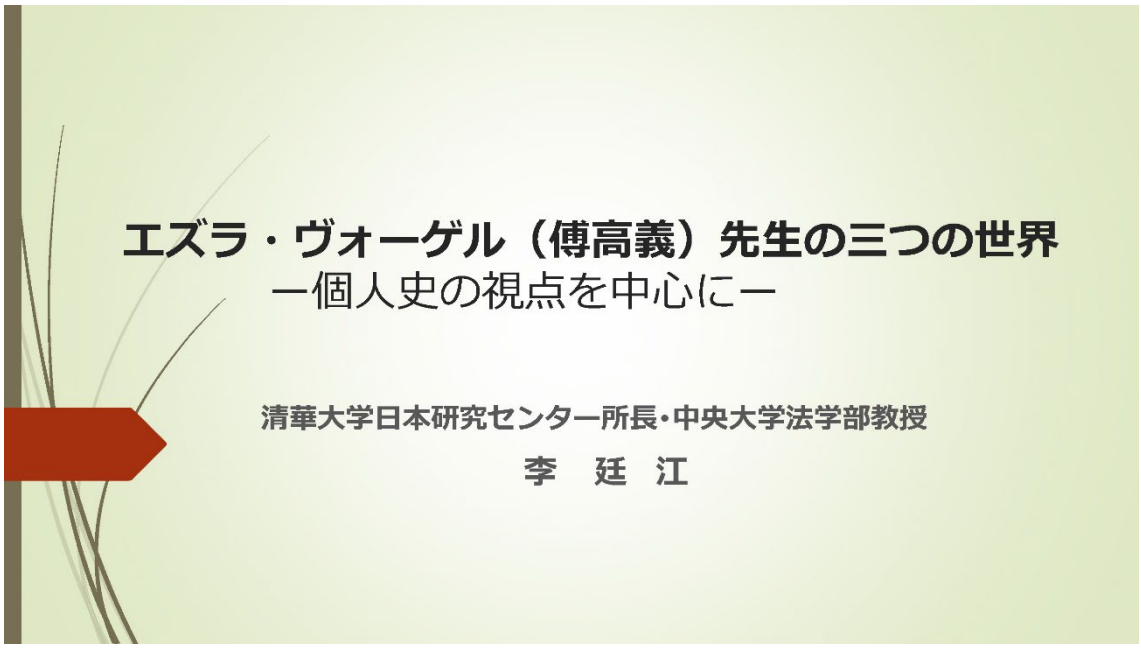
第 2 回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム
「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」
〈パネラースピーチ〉

エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界

―個人史の視点を中心に―

李廷江
（清華大学日本研究センター所長・中央大学法学部教授）



ご紹介にあずかりました李廷江と申します。本日は愛知大学で開催されていますエズラ・ヴォーゲル（Ezra F. Vogel, 中国名：傅高義）先生を記念するフォーラムに参加させていただき、大変光栄に存じます。愛知大学は、私にとって大学院時代からの学びの場であり、また日本で教職に就いた後も、先輩や後輩たちと共に学術交流を深めてきた大切な場所でございます。

故ヴォーゲル先生のご縁により、愛知大学では昨年、先生の蔵書の寄贈を受け、「エズラ・ヴォーゲル文庫」が創設されました。昨年も本フォーラムに参加させていただき、今年もまたこのような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。本日は少し重い気持ちで参加させていただいております。また、さきほど國分先生、ダイク先生のご講演を拝聴し、深い感銘を受けました。

私がヴォーゲル先生に初めてお会いしたのは、1981 年、研究者になりたての頃、北京でのことでした。その翌年に私は日本に留学し、留学生時代には國分先生と共に東京の国際文化会館で「中国社会科学研究会」を立ち上げました。この研究会では、ヴォーゲル先生に 2 度にわたり、ご講演いただいたことがあります。その後、日本で教職に就き、さらに清華大学日本研究センターの活動にも携わるようになり、ヴォーゲル先生との交流は実に 40 年以上にも及んでおります。この間、知的交流や学術交流を通じて、中日米関係に関する活動に関わってまいりました。本日は、私個人の視点から見たヴォーゲル先生について、ご報告させていただきたいと存じます。

本日の報告は、次の 4 つのテーマに分けてお話しいたします。

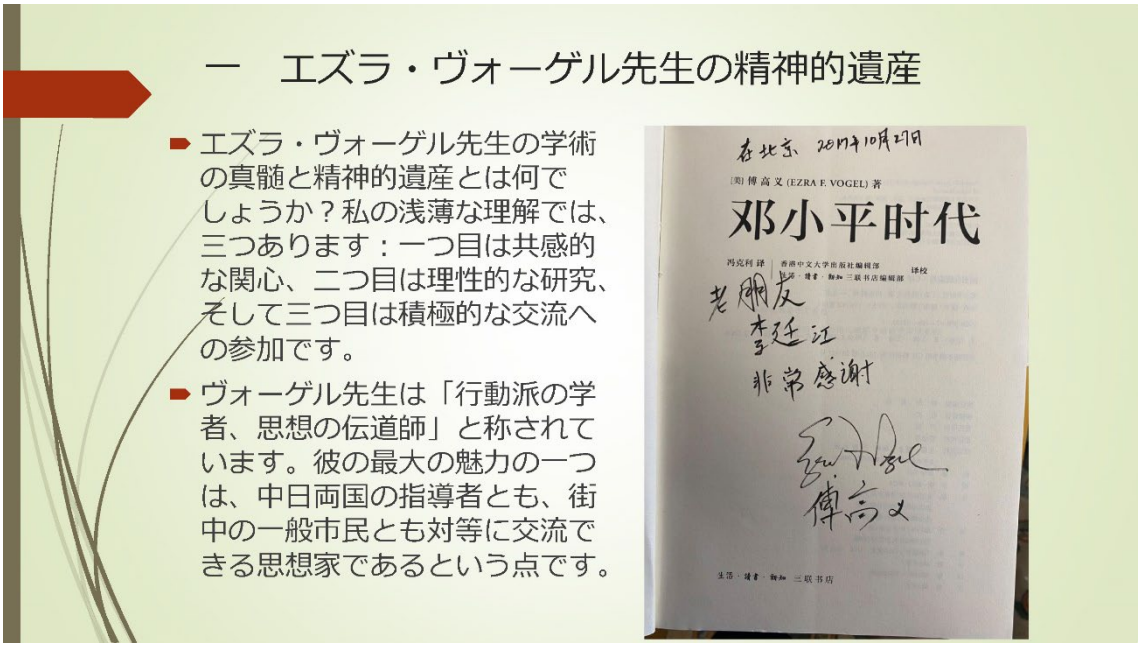
1 つ目は、ヴォーゲル先生のご逝去が東アジアにどれほど大きな衝撃と影響を与えたかについてです。

2 つ目は、ヴォーゲル先生が如何にアジア研究において重要な存在であったか、その意義を整理してみたいと思います。

3 つ目は、清華大学とヴォーゲル先生の関係について振り返りたいと思います。

最後に、私が行ってきたオーラルヒストリー研究の一環として、20 数年前にヴォーゲル先生に行ったインタビューの録音の一部をご紹介し、それを通じて先生の人生の原点について考えてみたいと思います。

Ⅰ．エズラ・ヴォーゲル先生の精神的遺産



まず、ヴォーゲル先生のご逝去が東アジアにどれほど大きな衝撃と影響を与えたかについてです。

ヴォーゲル先生が亡くなられてから、私はさまざまな形で記念行事を行ってまいりました。過去のメールや資料を読み返すたびに、先生のご指導や温かいご支援を思い出したりします。私が考える先生の精神的遺産と学術的真髄は、以下の 3 点に集約されます。

1 つ目は、人に対する深い関心。

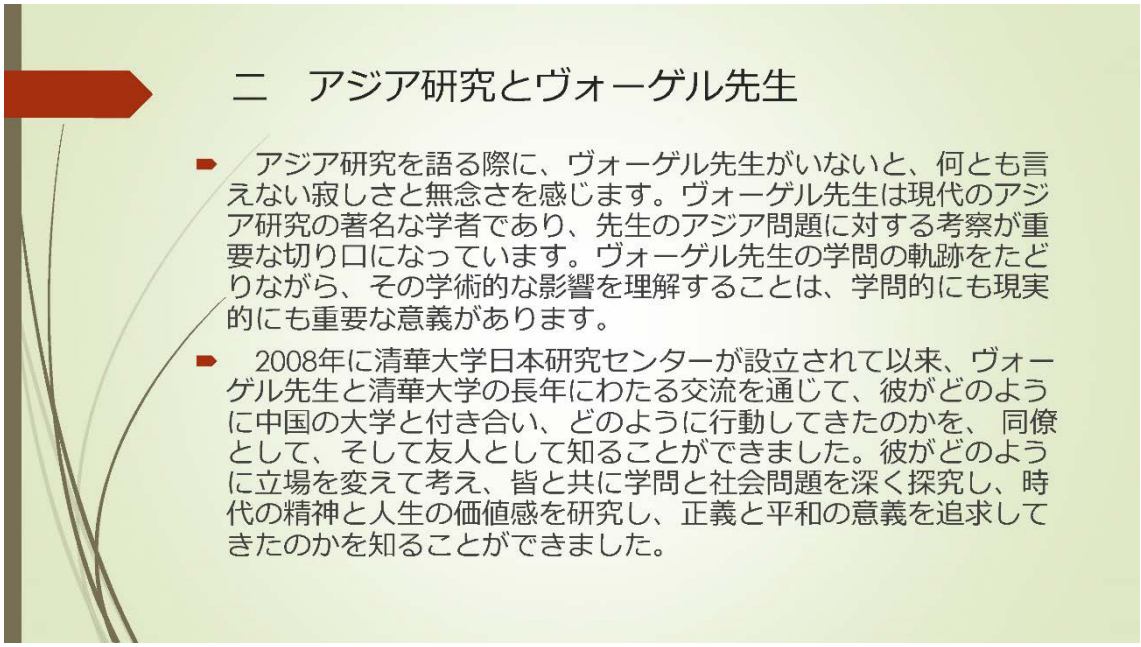
2 つ目は、理性的な研究に徹底した姿勢。

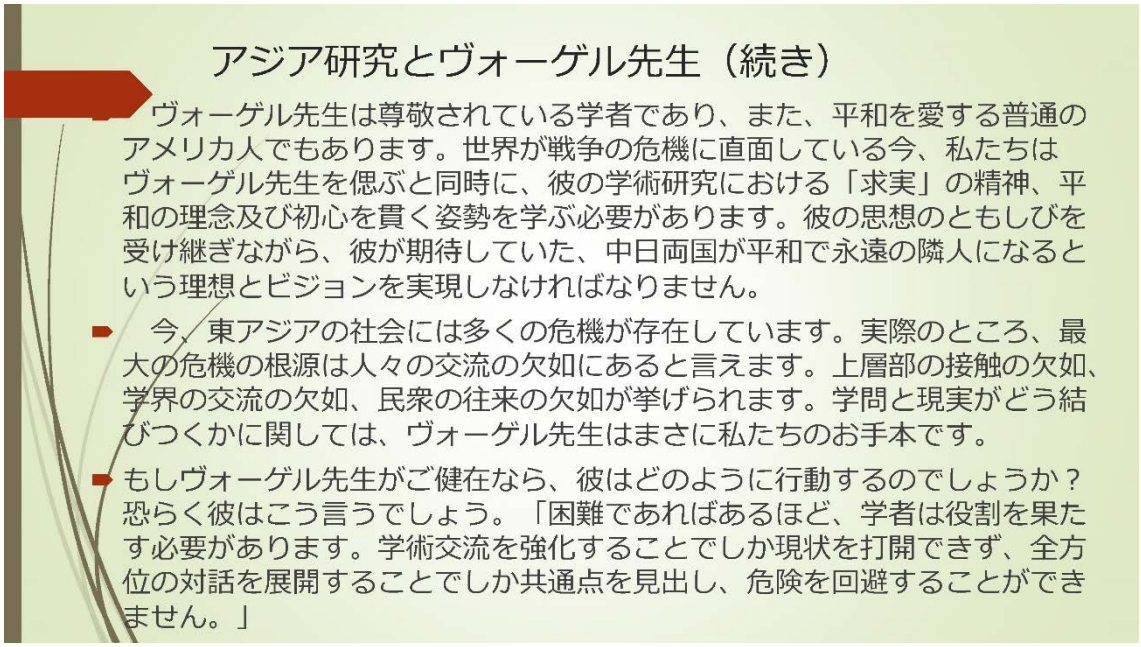
3 つ目は、行動派の学者として積極的に参画する態度です。

ヴォーゲル先生は「行動派の学者」、「思想の伝道師」として知られ、特に中日両国の指導者から一般市民まで、誰に対しても対等に接する姿勢が多くの人々を魅了してきました。その思想と行動力こそが、先生の大きな遺産であると確信しております。

そう考えるとき、我々がアジア研究を語る際に、ヴォーゲル先生がいらっしゃらないということは如何に寂しく、無念なのかを痛感いたします。ヴォーゲル先生は、常に大きな問題意識を抱きながら、学問が如何に社会に関与し、どのようにして真の平和が実現できるのかを追求してこられました。

Ⅱ．アジア研究とヴォーゲル先生





現在、東アジアの社会には多くの危機が存在しています。その最大の原因は、交流そのものが不足していることにあるのではないでしょうか。我々がこうして共通の課題に直面しながらヴォーゲル先生を偲ぶなかで、もし先生がここにおられるとしたら、なにをおっしゃるのでしょうか。恐らく先生はこう語られるはずです。「困難であればあるほど学者の役割が重要であり、学術交流の強化こそが現状を打開する鍵である」。そして、「全方

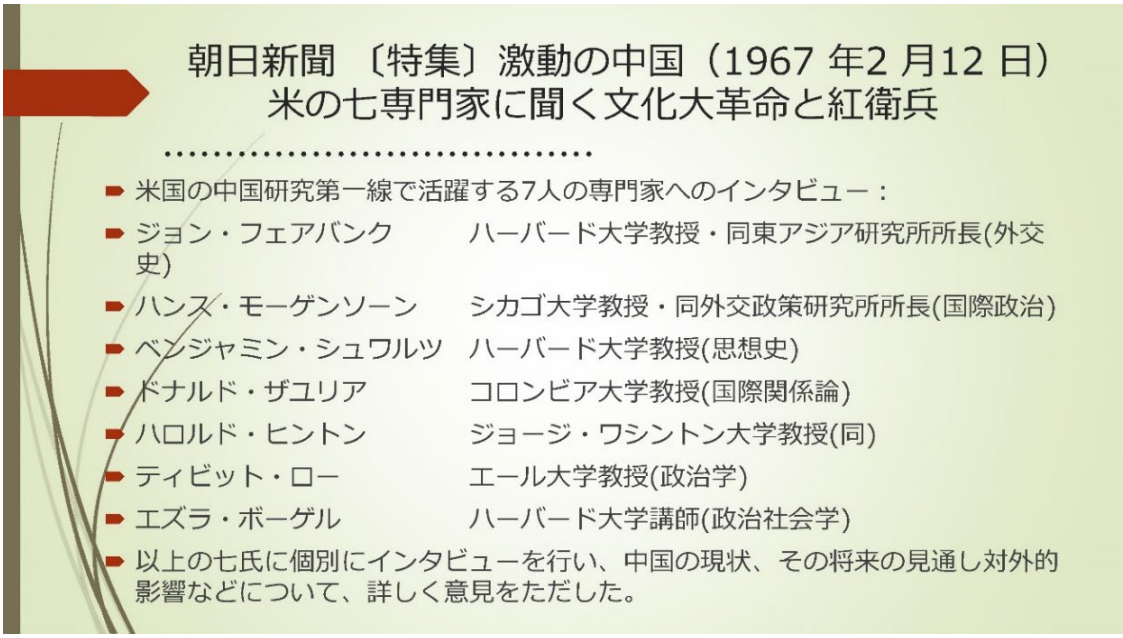
位の対話を通じて共通点を見出し、危機回避の道を探らなければならない」と強調されるでしょう。

ヴォーゲル先生が亡くなられたのは、コロナパンデミックの最中であり、中米関係が日に日に悪化していた時期と重なりました。そのような激動の時代にあって、先生の急逝は多くの人々に重く受け止められました。したがって、先生の死がもたらした衝撃や、先生がご存命だった時代の意義を振り返るということは、我々にとって改めて考え直す貴重な機会にもなっていると思います。先生の残された精神的遺産とその真髄について、我々は日々深く考えるべきだと思っております。

では、ヴォーゲル先生の精神、研究方法、そして残された遺産とは何なのでしょうか。私の理解では、先生の特筆すべき特徴は、常に現実に対して問題意識を持ちながら、真摯に歴史に学び、新たな未来を切り拓くという姿勢にあったのではないかと思います。

次に、ヴォーゲル先生が如何にアジア研究において重要な存在であったのか、その意義について整理してみたいと思います。

先ほどフェアバンク（John Fairbank, 費正清）先生やシュウォルツ（Benjamin Schwartz, 史華慈）先生のお話が出ましたが、1967 年に朝日新聞が「激動の中国」という特集を掲載されました。その特集には、アメリカを代表する 7 名の学者が登場し、当時 37 歳のヴォーゲル先生もその一人としてデビューし、堂々と自身の見解を述べておられました。今振り返ると、これは非常に意義深いことだと思います。以下は、1967 年当時のインタビューに登場した学者のリストです。

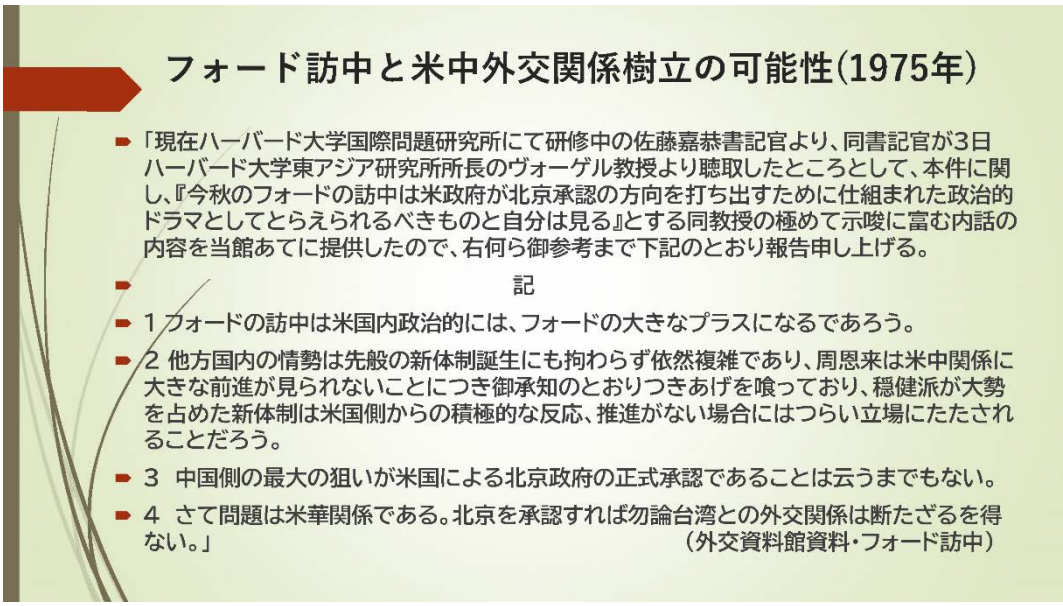


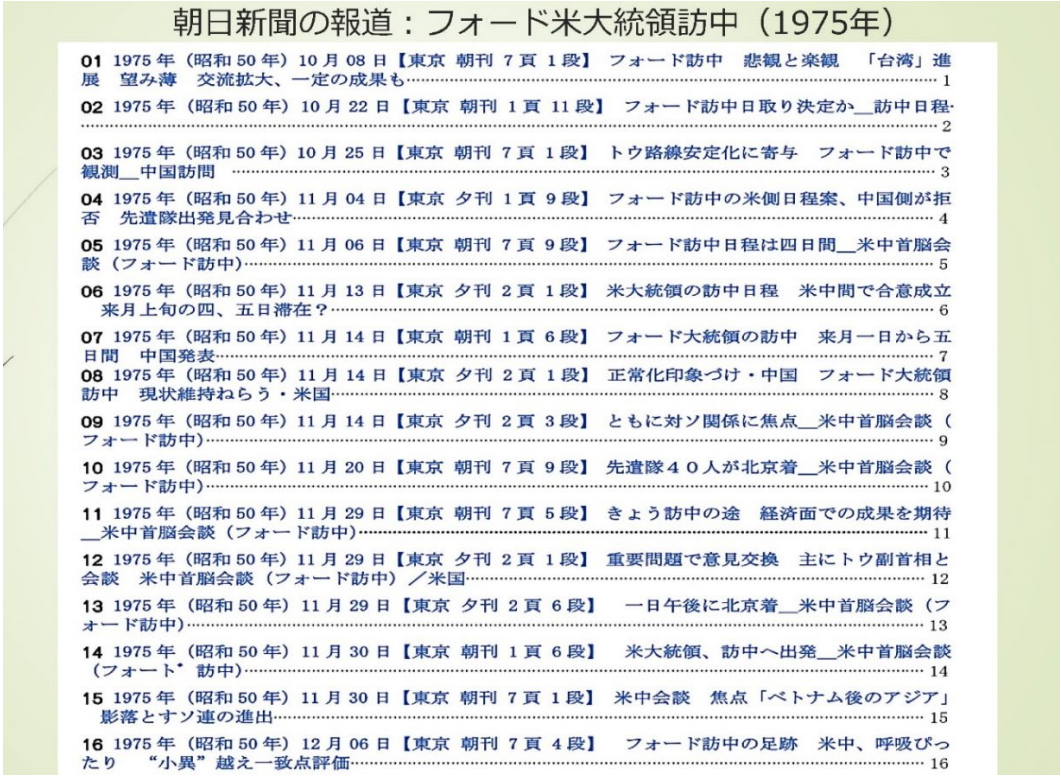
もう一つの記事があります。実は、私は現在、1975 年のフォード米大統領の訪中に関する調査を行っております。外交資料館に所蔵されている関連資料を調べたところ、ヴォーゲル先生に関する資料を 1 点発見いたしました。当時、ハーバード大学国際問題研究所に

て研修中だった佐藤嘉恭書記官（後に中国大使）が、ヴォーゲル先生に対してインタビューを行い、フォード訪中についての意見を伺ったときの記録です。

ヴォーゲル先生が述べられた 4 つの意見はいずれも非常に重要なものでした。その内容は以下のとおりです。

- フォードの訪中は米国内政的にも、フォードにとって大きなプラスになる。
- 中国の内政事情に関する説明。
- 中国側の最大の狙いは、米国による北京政府の正式承認である。
- 米国は、北京を承認すれば台湾と断交せざるを得ず、台湾関係に問題が生じる。





これらの意見を裏付けるように、1975 年当時の朝日新聞のフォード訪中の関連記事を読むと、ヴォーゲル先生が提起された問題の多くは現実に当たっていたことが分かります。

以上のように、1967 年の文化大革命に関するヴォーゲル先生のご発言とご見解、1975 年のフォード訪中に関するご意見を紹介させていただきました。よく考えると、その後の先生の代表作である『ジャパン・アズ・ナンバーワン』や『中国の実験—改革下の広東—』は、常に時代の要請に応える形で書かれていたことが分かります。先生は一貫してそのような姿勢で行動され、我々の後進には研究のお手本を示してくださいました。

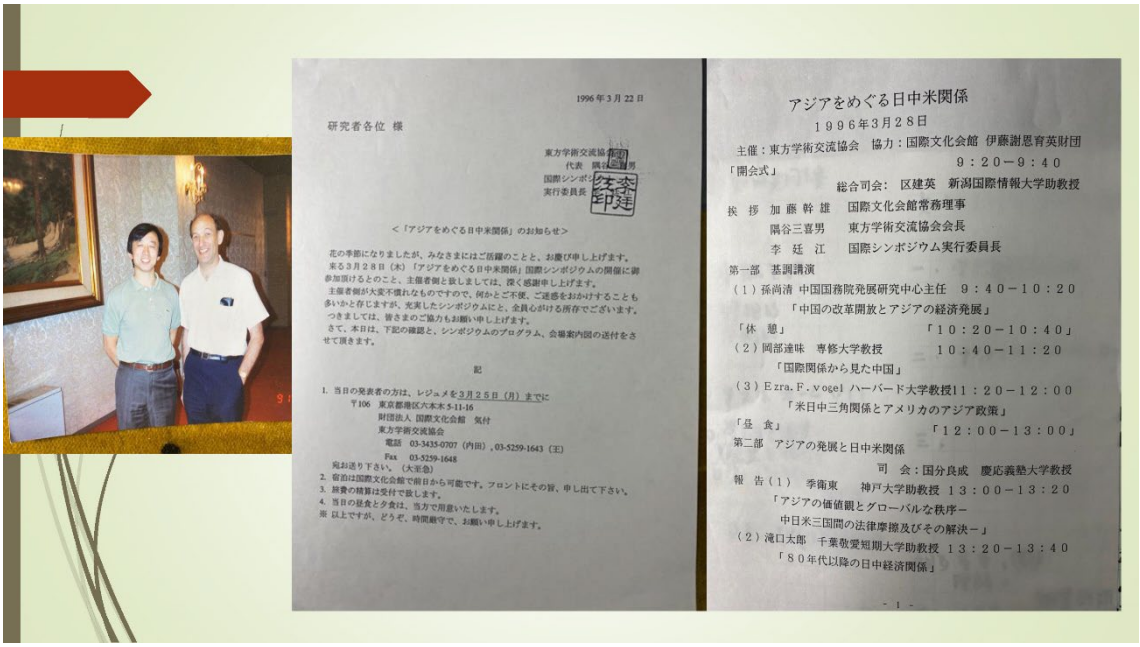
特に『ジャパン・アズ・ナンバーワン』は、中国でも大きな反響を呼び起こしました。1981 年、ヴォーゲル先生が中国社会科学院を訪問された際に、この本の内容を中国語で説明された時の様子を今でも鮮明に覚えております。私は最前列に座り、録音を担当しておりました。この時のご縁はその後も長く続きました。ヴォーゲル先生の学問への姿勢は、歴史から現在、そして未来へと、生涯にわたり貫かれていたと思います。その後の先生の代表作として、『現代中国の父 鄧小平』や『日中関係史』などが挙げられます。

さらに、1990 年の江沢民国家主席の訪日において、多くの課題が残されました。ヴォーゲル先生はそれらの問題に対して詳しく検討されました。1997 年に江沢民国家主席が訪米した際に、ヴォーゲル先生のご尽力により、江主席のハーバード大学訪問と講演会が成功裏に実現されました。このように常に問題意識を持ちながら、日々努力している姿勢こそ、ヴォーゲル先生の大きな特徴なのではないかと思います。

ヴォーゲル先生のもう一つの特徴は、単なる象牙の塔の学者ではなく、幅広い領域を渉猟しながら、大きなスケールで研究を展開されたところです。これは先生の自信の現れであると同時に、主要な分野で確実な成果を挙げられた証でもあります。

また、胡耀邦の伝記を書く際に、多くの関係者たちに直接会い、インタビューを重ねるという徹底した方法を取られました。この過程において、清華大学の学長や私自身も一部同行させていただきました。それは私には到底真似できない研究姿勢です。先生の存在が如何に大きく、稀有なものであるかを強く感じておりました。

私は 1992 年以降、2 回にわたり計 4 年間ハーバード大学に滞在し、研究に取り組んでまいりました。その期間中、ヴォーゲル先生との交流を深め、多くのことを学ぶことができました。次の写真は、1991 年に撮影したヴォーゲル先生とのツーショットです。1992 年にハーバード大学を訪ねた際、先生は「そろそろ政府の仕事をするけれども、2 年後に一緒にアジア問題についてなにかやりましょう」と約束してくださいました。



1996年3月22日

研究者各位 様

東方学術交流協会
代表 隅谷三喜男
国際シンポ
実行委員長 李廷江

<「アジアをめぐる日中米関係」のお知らせ>

花の季節になりましたが、みなさまにはご活躍のことと、お慶び申し上げます。
来る3月28日（水）「アジアをめぐる日中米関係」国際シンポジウムの開催に御参加頂けるとのこと、主催者側と致しましては、深く感謝申し上げます。
主催者側が大変不慣れなものですので、何かとご不便、ご迷惑をおかけすることも多いかと存じますが、充実したシンポジウムにと、全員心がける所存でございます。
つきましては、皆さまのご協力もお願い申し上げます。
さて、本日は、下記の徽章と、シンポジウムのプログラム、会場案内図の送付をさせて頂きます。

記

1. 当日の発表者の方は、レジュメを3月25日（月）までに
〒106 東京都港区六本木5-11-16
財団法人 国際文化会館 気付
東方学術交流協会
電話 03-3435-0707（内田）, 03-5259-1643（王）
Fax 03-5259-1648
宛お送り下さい。（大至急）
2. 宿泊は国際文化会館で前日から可能です。フロントにその旨、申し出て下さい。
3. 旅費の精算は受付で致します。
4. 当日の昼食と夕食は、当方で用意いたします。
※ 以上ですが、どうぞ、時間厳守で、お願い申し上げます。

アジアをめぐる日中米関係

1996年3月28日

主催：東方学術交流協会　協力：国際文化会館 伊藤謝恩育英財団

「開会式」　9：20－9：40
総合司会：　区建英　新潟国際情報大学助教授

挨　拶　加藤幹雄　国際文化会館常務理事
隅谷三喜男　東方学術交流協会会長
李　廷　江　国際シンポジウム実行委員長

第一部　基調講演

（1）孫尚清 中国国務院発展研究中心主任　9：40－10：20
「中国の改革開放とアジアの経済発展」

「休　憩」　「10：20－10：40」

（2）岡部達味　専修大学教授　10：40－11：20
「国際関係から見た中国」

（3）Ezra. F. vogel ハーバード大学教授11：20－12：00
「米日中三角関係とアメリカのアジア政策」

「昼　食」　「12：00－13：00」

第二部　アジアの発展と日中米関係
司　会：国分良成　慶応義塾大学教授

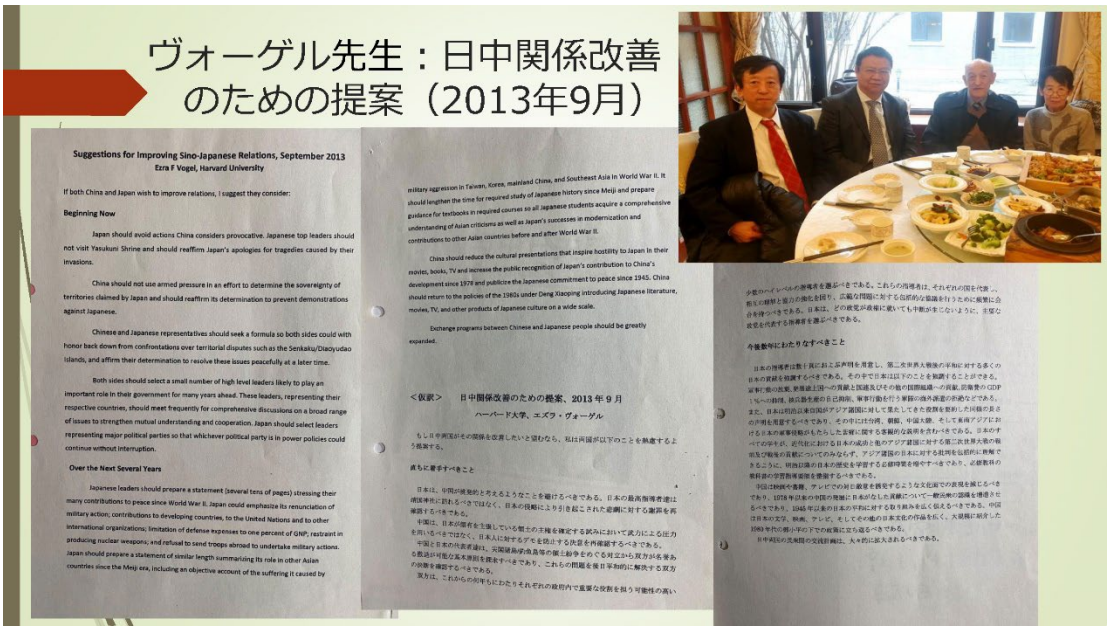
報　告（1）　季衛東　神戸大学助教授　13：00－13：20
「アジアの価値観とグローバルな秩序－
中日米三国間の法律摩擦及びその解決－」

（2）滝口太郎　千葉敬愛短期大学助教授　13：20－13：40
「80年代以降の日中経済関係」

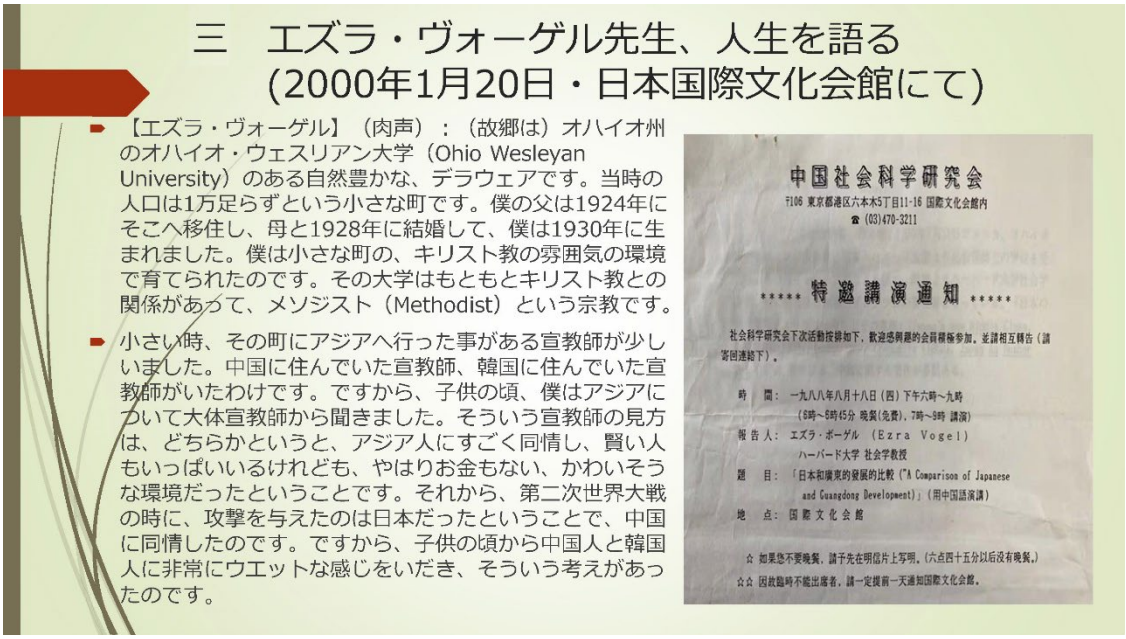
－1－

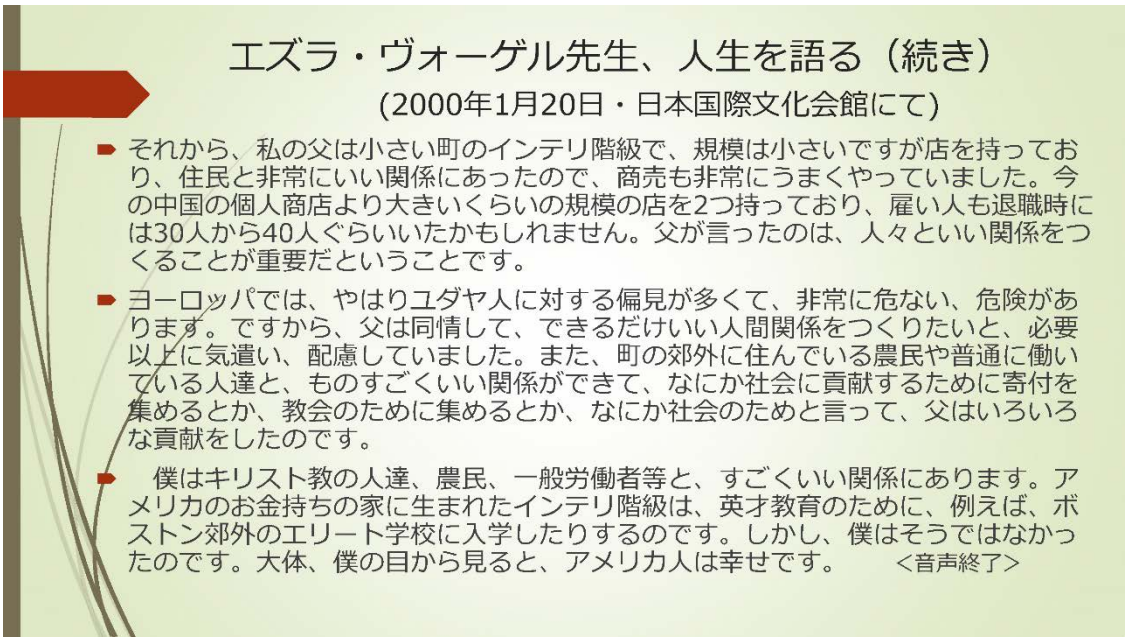
その結果、1996 年 3 月、中日米のアジア政策に関する国際会議が東京の国際文化会館で開催されました。当時の代表者は、アメリカ側がヴォーゲル先生、中国側が中国国務院発展研究センター主任の孫尚清（Sun Shangqing）先生、日本側が岡部達味先生や國分先生といった顔ぶれでした。この会議は、おそらく中日米のアジア政策に関する最初の国際会議だったのではないかと思います。

また、2013 年 9 月に、ヴォーゲル先生が中日関係の打開策に関する英語でまとめた提案を発表されました。ヴォーゲル先生は、歴史・現在・未来といった「三位一体」の視点で学術研究を進められ、世界の人々と交流することの重要性を教えてくださいました。



Ⅲ．エズラ・ヴォーゲル先生、人生を語る



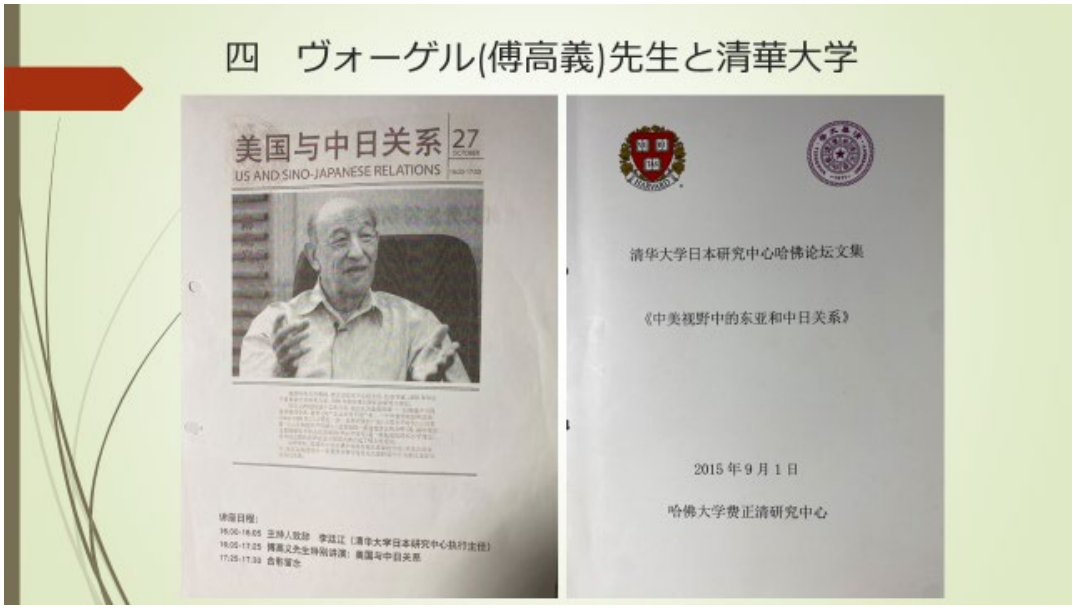


次に、オーラルヒストリー研究の一環として、20 数年前にヴォーゲル先生に対して行ったインタビューの録音の一部をご紹介いたします。

【エズラ・ヴォーゲル先生の肉声】
「私の故郷はオハイオ州の自然豊かなデラウェアという町で、そこにはオハイオ・ウェスリアン大学がありました。当時の人口は 1 万人足らずの小さな町でした。父は 1924 年にそこに移住し、母と 1928 年に結婚しました。私は 1930 年に生まれましたが、この小さな町でキリスト教の影響を受けながら育ちました。アジアについては、町に住んでいた中国や韓国に行ったことのある宣教師から話を聞いてきたので、幼少期からアジア人に対する親近感を抱いていました。父は町のインテリで、住民と良好な関係を築きながら、少し大きな規模の店を経営し、社会に多くの貢献をしました。そうした環境のなかで育ったことが、私自身の価値観の形成に大きな影響を与えてくれたと思います。」

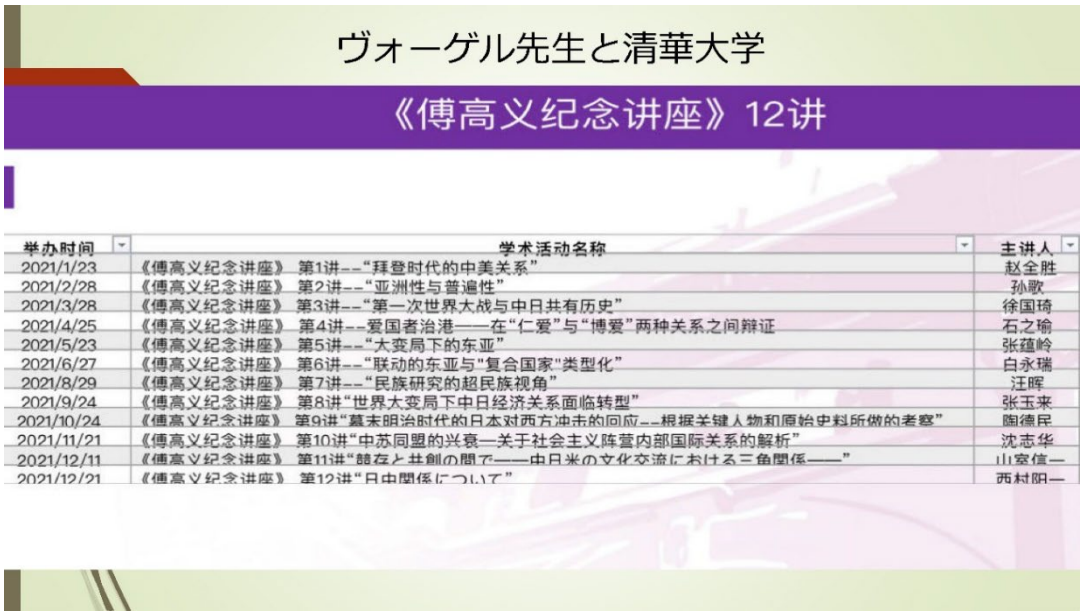
このエピソードを聞いて改めて思ったのは、連携の重要性です。例えば、ヴォーゲル先生は江沢民国家主席の訪日を重視され、國分先生とも議論を重ねられた結果、江沢民国家主席の訪米時にはハーバード大学での講演会を成功に導かれました。また、ヴォーゲル先生からは、目先の結果を急ぐのではなく、努力すれば必ず達成できるという期待を共有しながら、それを実現することの重要性を学ぶことができました。

Ⅳ．ヴォーゲル（傅高義）先生と清華大学



最後に、清華大学とヴォーゲル先生の関係について振り返りたいと思います。

清華大学を「第二の家」と見ておられたヴォーゲル先生が亡くなられた際に、清華大学の関係者たちも深い悲しみに包まれました。そして、先生の精神を継承し、新たな中日米関係を構築するために、「エズラ・ヴォーゲル記念講座」が開設されました。その背景には、関係者たちの共通した思いがありました。ヴォーゲル先生は清華大学で学生との交流においては、「学問とはなにか」を丁寧に教えられる一方で、研究者との間では真剣な議論を繰り広げられました。



举办时间	学术活动名称	主讲人
2021/1/23	《傅高义纪念讲座》 第1讲--"拜登时代的中美关系"	赵全胜
2021/2/28	《傅高义纪念讲座》 第2讲--"亚洲性与普遍性"	孙歌
2021/3/28	《傅高义纪念讲座》 第3讲--"第一次世界大战与中日共有历史"	徐国琦
2021/4/25	《傅高义纪念讲座》 第4讲--爱国者治港——在"仁爱"与"博爱"两种关系之间辩证	石之瑜
2021/5/23	《傅高义纪念讲座》 第5讲--"大变局下的东亚"	张蕴岭
2021/6/27	《傅高义纪念讲座》 第6讲--"联动的东亚与"复合国家"类型化"	白永瑞
2021/8/29	《傅高义纪念讲座》 第7讲--"民族研究的超民族视角"	汪晖
2021/9/24	《傅高义纪念讲座》 第8讲"世界大变局下中日经济关系面临转型"	张玉来
2021/10/24	《傅高义纪念讲座》 第9讲"幕末明治时代的日本对西方冲击的回应--根据关键人物和原始史料所做的考察"	陶德民
2021/11/21	《傅高义纪念讲座》 第10讲"中苏同盟的兴衰—关于社会主义阵营内部国际关系的解析"	沈志华
2021/12/11	《傅高义纪念讲座》 第11讲"普存と共創の間で——中日米の文化交流における三角関係——"	山室信一
2021/12/21	《傅高义纪念讲座》 第12讲"日中関係について"	西村阳一

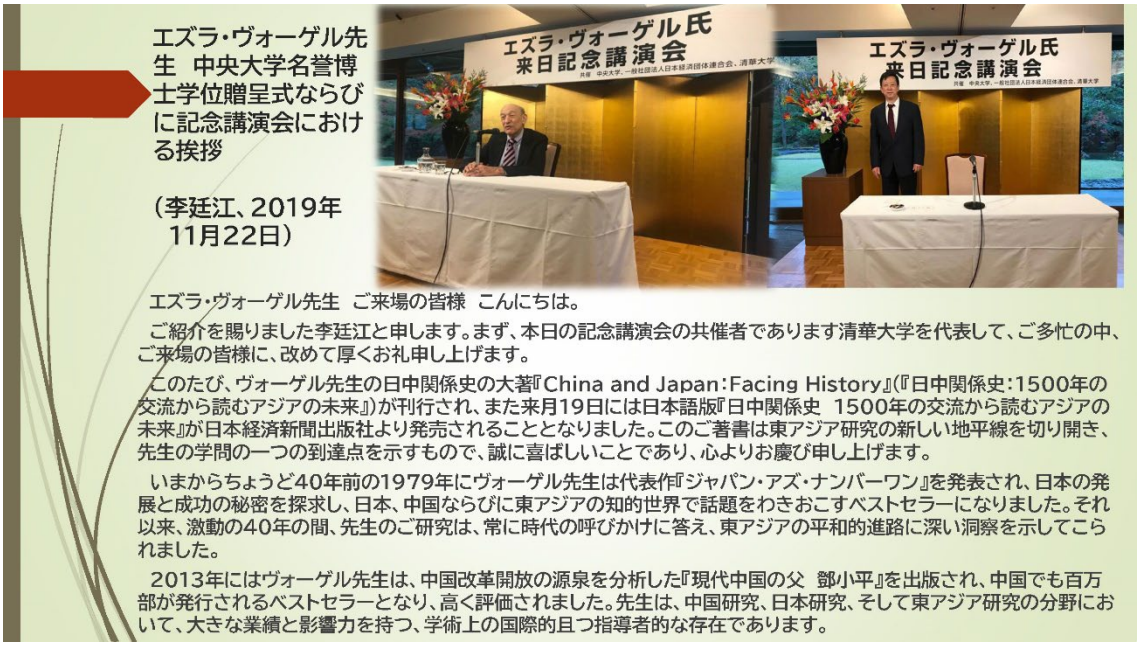
特に私にとって強く印象に残っているのは、先生がおっしゃった「永遠の隣人」という言葉です。この言葉自体は、中国の外交官・張香山（Zhang Xiangshang）氏が出版した本のタイトルにもなっているのですが、ヴォーゲル先生がこの言葉を広められ、今では中日関係を象徴する共通語になっています。

今後、我々はヴォーゲル先生の研究と指導を基に、活動の範囲を中国や日本だけでなく、アメリカにも広げていくべきだと考えております。ハーバード大学では清華大学日本研究センターの講座が開設されたことや、中央大学がヴォーゲル先生に名誉博士号を授与したことは、その具体的な成果と言えるでしょう。これからもヴォーゲル先生の業績を高く評価し、次世代へ引き継いでいきたいと願っております。

ヴォーゲル先生と最後にお会いしたのは、2019 年 12 月 22 日、東京の国際文化会館で行われた中央大学名誉博士学位贈呈式のときでした。その席で、私はヴォーゲル先生を紹介

する役目を務めさせていただきました。その後も先生とメールで連絡を取り合い、2020 年 11 月には「ぜひオンラインでご講演をお願いしたい」とやり取りをしておりました。

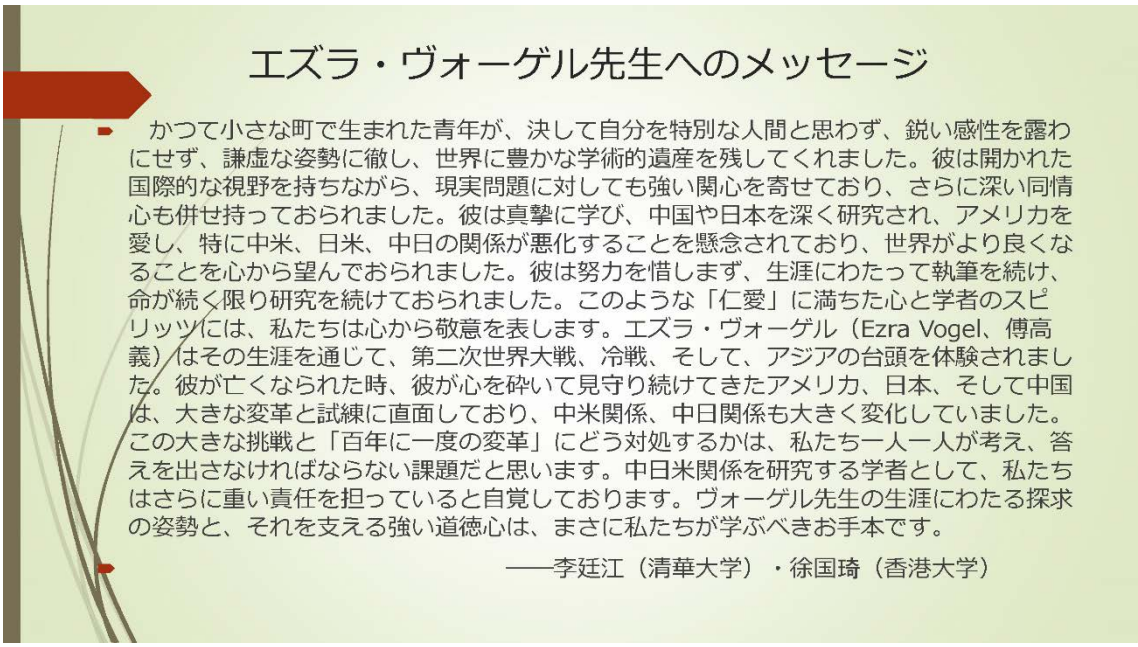
ある日突然、ヴォーゲル先生から「来月、小さな手術を受ける予定なので、講演の日程を 12 月 20 日以降にしてもらえないか。ただ、無理に合わせる必要はないよ」とのご連絡をいただきました。そして最後のメールには、「1 月 6 日か 7 日で構わないよ」と記されており、また、私が深圳に行く予定だとお伝えしたところ、「どうぞ深圳を楽しんでください」という温かいお言葉も添えられていました。



清華大学の学術顧問を務められていたとはいえ、ヴォーゲル先生はすでに 90 歳というご高齢でした。にもかかわらず、先生はいつも仕事を優先して考え、常に職務に心を砕いておられました。特に深圳や中国に対する先生の深い愛情を、そのメールを見るたびに思い出し、非常に感慨深いものがありました。

本日は、ヴォーゲル先生との個人的な関わりを軸に、先生の世界観についてお話しさせていただきました。先生との交流は 40 年にわたり続いてきましたが、その歴史を振り返るなかで強く思ったのは、先生の時代が決して順風満帆ではなかったということです。中米間の国交がなかった時代、天安門事件など多くの困難があったなかで、先生の存在感がひときわ際立っておられました。天安門事件以降も、先生と深い交流を続けておりました。

最後に、ヴォーゲル先生の教え子であり、現在香港大学で教えておられる徐国琦さんと、先生のご功績について話し合いながらまとめたメッセージを皆さまと共有させていただきます。

エズラ・ヴォーゲル先生の時代は一区切りを迎えましたが、新しい時代において、先生がその生涯を通じて体現された家訓や平和の理念を如何に継承していくかが、私たちに課せられた大きな課題であると感じております。そのために、何としてでもこの理念を受け継いで、次世代に伝えていかなければならないというのが、私の今の心境です。

最後に、ヴォーゲル先生への心からの感謝を表し、私の報告を締めくくらせていただきます。本日はご清聴、誠にありがとうございました。